

—エレミア38章・4-6、8-10、ヘブライ12章1-4、ルカ12章・49-53—

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)[「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、

しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、

対立して分かれる。」

—ルカ 12章—ルカ 12章—

## キリストが示す平和

「ハンマーを持つ者は、すべてが釘に見える」との米国の諺は、よく言ったものです！

生きるために障害となるものは、正義一辺倒で、あるいは、相手の事情、背景を考慮することなく、ハンマーをふるって打ち砕くことに向かうのが人類の歴史のようです。

人は平和を願いながら、なぜ、悲惨な戦争を繰り返すのでしょうか？ ある人は、なくならない戦争を、神のせいになります。「神がいるのになぜ戦争があるのか」と。これらの人々に向けて、神は語ります。「私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。むしろ分裂だ」同じく、マタイの平行箇所では、「剣をもたらすために来たのだ」と。戦争は人間のしわざです！ 神は人類の不始末の尻拭いをしに来たわけではありません。来

られたのは、わたしたちの生き方に責任を取らせるためです。

私の内に秘めた、敵対するものを見つめさせ、それを摘出させるために剣を用いるのです。剣とは、人を打つためのものではなく、自分に向け、自分の内にある、敵対する原因を切り取るための「聖霊」です。人類が真の平和を得るためには、自らの罪と戦って血を流すほどの回心が必要であることを主イエスは示しておられるのです。

被害者であっても「日が暮れるまで怒ったままで居てはいけません(エフエソ4.26) 赦しの証し

がなければ、砂漠で生活するよう不毛で荒れた人生しかありません。ゆるしとは、心の平和を得るために私たちの弱い手に与えられた道具なのです。恨み、怒り、暴力、復讐を手放すことが幸せになるための必要条件です。

科学者も口にするようになりました。自然界の「納豆」「ナンプラー」のごとく、「すべての命は、壁にぶつかつたら発酵」と。今までの生き方(自我)を捨てて、新しい命(変容)で生き伸びる道です。

初代教会に倣い、公平な分配で平和を目指した共産主義でしたが、失敗の誤算は、人間の本性「ゴイズム」を考慮せず、「闘争」に解決を求めた事です。

聖霊によって自我を脱皮(変容)し、愛の人を生きることがキリストの示す平和です。そのために信仰者は自分に剣を向けるのです。キリストの受けた十字架が拘束された体を捨てて自由な心で神に向かう道であったことを信じて。

2022年 8月14日

主任司祭 昌川信雄